

Dear地球民

第16号
1996年6月発行

編集発行
☎259-03 神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1
湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111

“オーストラリア発” 国際親善を求めて —— ポートスチープンス訪問記 ——

① まえがき

協会では、85年に米国カリフォルニア州サンファンカピストラーノ市と交流を続け、91年に姉妹都市提携を結ぼうとした矢先に、財政的に不可能と先方から破談の申し込みを受けた。

あれから5年、そろそろ痛手から回復されたと判断した協会は、新しく海外都市の市民との親善交流事業を実施することになった。

対象都市に豪州ポートスチープンス市に白羽の矢を立てた。同市を知ったのは、協会会員の高橋行雄氏からHISのオーストラリア人ダニエル・ハキム氏を紹介され、彼から経営コンサルタントの国司義彦氏を紹介され、さらに国司氏から同市を紹介されたというのが経緯である。

第1回目である今回の訪問メンバーは、高橋賢次副会長、町教育委員会の村田義秋課長そして私の3名である。

日程は4月12日から20日までの7泊9日で、13日から17日朝までポートスチープンスに滞在した。紹介者の国司氏には、前日に同市に乗り込んでもらった。

② 第1歩

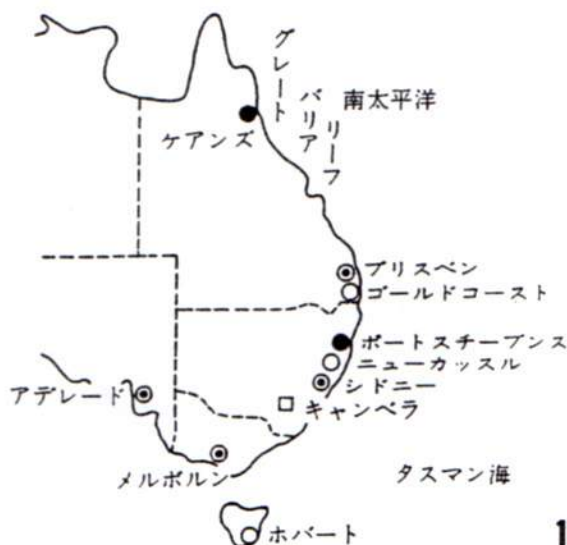
4月13日午後2時、シドニー・セントラルバスターミナルを出発したバスは、週末のためか満席であった。シドニー市内を抜け、フリーウェイを北に進んだ。一步郊外に出れば、広々

とした原野が続く。2時間程ノンストップで走っていたバスは、各駅停車に早変わり。乗客全員大きなトランクを持ち込んでの旅なので、停車時間は5分はかかる。ポートスチープンスの海岸線に出た頃は、日はどっぷりと暮れた。予定時刻より30分遅れの午後6時10分、ようやく目的地ネルソンベイに到着した。ホテル社長と国司氏（通称ビル）が出迎えてくれた。

「今夜のディナーは私の奢りだ。」

夕食に同席したホテルのボブ・ウエストバリー社長は歓迎の意を表した。彼はポートスチープンス観光協会理事で、58才。ここでは顔役だ。

「キミヒロ長いな。よし、ヒロで行こう。」



なぜか私だけ『ヒロ』と言う名が付いてしまった。以後、どこへ行っても『ヒロ』で通った。ポートスチーブンスの人口は5万2千。中心地がネルソンベイで人口は7千。主な産業は観光、農業、酪農、漁業だとボブは言った。

「明朝、山に登るけど、一緒に登らないか？ホテルから徒歩で3時間だ。」

夕食が終わった時、ボブが皆を誘った。全員断ったが、私だけ同意した。

「OK、ヒロ、明朝6時半、フロントで。」

③ トマリー・ヘッド

「あれ？車？」

ボブはジープのドアを開けて待っていた。

「あれはジョーク。レッツゴー！」

7、8分で山のふもとに到着。

「山の名はトマリー。標高161m。」

ボブは山を指差し、叫んだ。

ボブは普通の足の運びだが、私は駆け足。身長も違うが足の長さが違う。山肌は岩盤。登るに従い急坂だ。ボブはスイスイ、私は息絶え絶え。来なければよかったと後悔した。

「やった！頂上だ。」

一瞬、息を飲んだ。何という美しさだ。昇り始めた太陽に雲がかかり、透き間から黄金色の斜光を360度放っていた。眼下は金色に輝く海面。海に浮かぶ島々。しばし呆然と立ち竦んだ。

頂上から見渡すと、ポートスチーブンスの地形がよく分かる。東西に横長に伸びた広大な湾。



荘厳なポートスチーブンスの夜明け
(トマリーヘッドよりタスマン海を望む)

私達が立っているトマリーヘッドは、南側のトマリー半島の先端。向かい側、即ち北側はヤカーバ半島。その先端のヤカーバヘッドとは極端に接近し、外海との唯一の出入り口となっている。ほとんどの住宅街はこちら南側のトマリー半島に点在している。

④ ランチ・クルーズ

「ハイ！君がヒロか？トマリーに登ったんだって？偉いぞ。」

見知らぬ人から握手を求められた。その後、数人から声を掛けられた。

元市長で、現在ポートスチーブンス市会議員のイネス・クレイトン氏の案内で、これからランチクルーズに出掛けるところだ。船付場のあるド・アルボラマリーナでの出来事だった。

午前11時、5、6隻のクルーザーは一斉に出港した。今朝登ったトマリーヘッド目指して南側海岸線を東に進む。乗客達はお互いに手を振り合った。

「左側に数頭のイルカが浮上して来ました。」スピーカーから船長の声 flowed。客は一斉に左に寄った。3頭の背びれが海上に現れた。船はイルカを避けるようにジクザクに進み始めた。船の左右はイルカだらけだ。

12時頃、海岸に接近して錨を降ろした。ジョアルベイ・ビーチ沖だ。ここで食事をした。

「船長が呼んでいます。」

イネスとビルの3人で明日の打ち合わせをしていたら、船員が呼びに来た。3人でコックピットに行った。

「今から歓迎のもてなしをしたい。」

船長はそう言って無線機を取り上げた。

「これから日本のお客様に歓迎の印として、灯台から3回信号が送られます。」

無線で連絡した後、船長はマイクに向かってしゃべった。乗客は一斉に灯台を見上げた。

『ピカー、ピカー、ピカー』

白色光の強烈な光が放された。船内から拍手が起こった。私は乗客に深々と頭を下げた。感激で胸が一杯だった。

⑤ ポートスチープンス市内視察

「先程は3回のシグナル、ありがとうございました。」

格好よく制服に身を固めた3人の灯台守りが歓迎してくれた。彼らは退役軍人で、ボランティアで海の安全を守っている。ここからの眺めも素晴らしい。湾の東側半分を見渡せた。

午後3時に上陸した私達は、イネスの案内で市内視察に出掛けた。ド・アルボラマリーナを後に、リトルマリーナを通過、ネルソンヘッドの灯台に直行した。

灯台を後に、ショアルベイに入った。左側に海岸、右側は住宅街。車も人影もほとんど見えない。ここで右折し、住宅街を抜けると、外海に出た。フィンガルベイである。半島の先端近くを縦断したことになる。ここで小休止。

左前方にビーチから砂州が海中に伸び、その先に島がある。フィンガル・スピットだ。干潮になると島とつながるそうだ。

再度、内海に戻り、ネルソンベイを西に進んだ。ダッチマンズベイ、バグナリスビーチ、サラマンダーベイを回り、ソルジャーズポイントで下車した。日没が迫っていた。

「ヒロ、いい写真撮れたか？ここはポートスチープンスの真ん中だ。あの大きな島はミドル島と言う。今、日が落ちようとしている小さな



ポートスチープンス唯一の外海との出入り口
(左:ヤカーバヘッド、右:トマリーヘッド)

島はブッシー島だ。」

私は皆から離れ、日没の写真を撮っているとイネスがやって来て説明してくれた。

⑥ テアン家訪問

「初めまして、伊藤です。」

「ヒロね？手紙をくれたのはあなたね？」

テアン夫妻は玄関口で私達を出迎えてくれた。

午後6時、ソルジャーズポイントからテアン家に直行した。イネスとはここで別れた。

テアン夫妻は共に元教師で、現在はリタイアしている。旦那をマイケル(通称ミック)、奥さんはジーンと言う。

「今日は特別の料理を作ったのよ。」

野菜を入れた混ぜごはんが出た。グシャグシャで超薄味。「まずい」やっと喉を通った。

「とても美味しい。ありがとう。」

心とは反対の言葉が出た。

「ハイ！キッド、スープを飲むか？」

ミックが私に言った。いつの間にか、私は子供にされてしまった。

テアン夫妻はビルの懇意の家族で、彼らのことは何度もビルから聞いていた。私には初対面とは思えない。事前に手紙のやり取りもした。そのためか、つい彼らに甘えてしまっていた。

⑦ ネルソンベイ商工会議所役員会

「今回の訪問は、両市民間の交流の糸口を掴むのが最大の目的です。皆さんから多くの市民を紹介していただけないでしょうか？」

「それは容易なことです。」

「さらに今後、こちらと湯河原町商工会と情報交換などの交流を希望します。」

「交流方法については検討課題だが、その提案には賛成です。」

15日午前7時20分から、私達の宿泊ホテル会議室で開かれた朝食付きの役員会に招かれた。男性7名、女性3名、そして私達4名が出席した。会議の内容は私には全く理解できな

った。会議終了後、ボブから私達を紹介され、懇親会に入った。

「ここはネルソンベイの繁華街です。まだ開店準備中ですが、日中は賑やかですよ。」

商工会議所のチャールズ・リンドストローム副会長の案内でダウントウンを見学した。パン屋、肉屋、魚屋、洋品屋、コンビニなどの商店初め、銀行、ガソリンスタンド、新聞屋、映画館などが軒を並べていた。それ程大きくないが、ポートスチープンスでは最大の繁華街だそうだ。



夕景が美しいネルソンベイ・アルボラマリーナ

⑧ オークベイル牧場動物園

「ヒロ、餌。」

イネスが餌の入った袋をくれた。私が歩き出すと、羊や山羊、ニワトリ、アヒルなどがゾロゾロついて来た。放し飼いのクジャクまでが物欲しそうに私を見ていた。目指すはカンガルー。観光客はまばらだ。

9時30分、繁華街からホテルに戻り、通訳の真船氏と合流、5人になった私達はイネスの運転するマイクロバスに乗った。ポートスチープンス市庁舎に向かったバスは、10時30分、ソルトアッシュにあるオークベイル牧場動物園に立ち寄った。

「グッドモーニング。」「グッドモーニング」

「スコッチコッキー。」「スコッチコッキー」

数羽の野生のボタンインコに似た色鮮やかな鳥に、イネスが声を掛けていた。鳥もそれに答えていた。私も1羽に声を掛けた。返事が戻って来た。楽しくなって、つい手を差し出した。

「危ない。」

イネスが私を制した。

「非常に危険な鳥だ。よく見ていろ。」

脇の下に挟んでいたパンフレットを棒状に丸めて、鳥の背中を撫でた。鳥は目にも止まらぬ早さで、紙の棒に咬み付いた。一瞬の内に直径2センチ程の棒は咬み切られていた。

⑨ ポートスチープンス市庁舎訪問

「友好関係を結ぶには、海に面していることと立地条件が似ていること。観光地で海に面している湯河原町はこの条件を満たしています。」
コリン・オブライエン市長は言った。

「6年前より交流している館山市より先に、湯河原町と姉妹都市を結ぶ訳には行きません。」
イネスが言った。

「私達は姉妹都市が目的ではなく、市民レベルでの交流を希望しています。特に小中高校生の交流を最優先させたいと思います。姉妹都市はその結果だと認識しています。」

私は言った。

「その考えには賛成だ。」

イネスが頷いた。

動物園を後、11時50分、レイモンドテラスにある市庁舎に到着した。玄関でコリン市長に出迎えられ、庁舎内を案内された。市長室でテッド・キャンベル・ゼネラルマネージャーを紹介された。市長室を出た後、市主催の昼食会会場に案内された。コリン市長、イネス元市長、テッド・ゼネラルマネージャー、それに私達5人が席に着いていた。

ここには国際交流活動や他の市民団体がほとんどないこと、市民と市行政とはほとんど関わりがないことなどが分かった。また、今後、学生の交流などの申し込み先は、市の姉妹都市課かイネスを通すことなど、具体的な話し合いがされた。

終わりに近づき、村田氏が湯河原町長からの

メッセージを英語で読み上げ、喝采を受けた。さらに湯河原町からの土産品と私達の協会からのハッピーを市長に贈呈した。その返礼に、市長から湯河原町長に贈呈品が贈られた。

⑩ ネルソンベイ高校訪問

「湯河原からの中高校生がホームステイしながら本校への短期入学は可能です。」

ドン・ファッサム校長は私たちの要望を快く承諾した。

第4日目の16日、イネスの案内でネルソンベイ高校を訪問した。昨日は市庁舎の後、ニューキャッスルを視察し、ホテルに戻った。

校長室での会談後、校長の案内で校内を見学した。この日は体育祭で学生はトマリー・スポーツクラブに行っていて、静かだった。

日本語教室に入った。日本の国旗や地図、相撲の絵、鯉のぼり、着物、50音表などが所狭しと飾られていた。日本語は必修科目だそうだ。

コンピューター教室に入った。30台程が配備されていた。全てインターネットで結ばれているようだ。

運動場に回った。芝が敷き詰められ、ゴルフ場のような。数頭の牛や羊のいるミニ牧場もあった。

この学校は98年に廃校となり、サラマンダーベイに新築される学校に移るのだと校長が説明した。

昼食後に体育祭を行っているスポーツクラブに回った。

⑪ 湯河原町主催ランチパーティー

「箱根には行ったけど、湯河原は知らなかった。湯河原は箱根に近かったのね。」

ジーンが言った。

ネルソンベイ高校を辞し、ホテルに戻った。私たちで返礼ランチパーティーを開いた。招待者は、イネス元市長、デービット・ファーガソン商工会議所会頭、ドン校長、テアン夫妻そし

てボブ夫妻である。

「ポートスチープスは素晴らしく気に入りました。是非、交流したいです。商工会議所とも。」

私はデービットに言った。

「承知している。うまくやろう。」

デービットはニコニコしながら、親指を立てて言った。

1時間のパーティーはアッという間に終わった。帰り際、ジーンにキスされた。

⑫ ハーバーサイドヘブン・リタイアビレッジ

「湯河原からようこそ。恐らくこの美しい場所を気に入ったと思う。素晴らしい友好関係が成立し、姉妹都市にまで発展することを願う。連邦政府より国旗を進呈したい。」

ボブ・バルドウィン連邦議会議員が挨拶し、オーストラリア国旗を手渡された。

昼食会の後、タマリー・スポーツクラブを回り、ハーバーサイドヘブン老人ホームを訪問した。ここで盛大なレセプションが用意されていた。私達の歓迎のため、連邦政府より公式にボブ議員を派遣してくれた。

会場には、ボブ連邦議員、イネス元市長、ビル・キング老人ホーム会長、同施設管理責任者夫妻、管理補佐官夫妻、ジェーン秘書、3名の入居者代表と連邦議員随行女性カメラマン、そして私達4名であった。

続いてイネスの挨拶があり、その後、湯河原からの土産をビル会長に贈呈した。特にビル会長は協会のハッピーが気に入ったらしく、それから2時間ずっと着用したままであった。

20分間のパーティーの後、施設を見学した。この施設は3ブロックに分かれており、第1ステージは、完全に独立した1戸建てで、バス、トイレ、キッチン付きで2ベッドルームを備え、健康体で独力で生活できる人達が入居する。

第2ステージは、やや体が不自由で、一部介

護を必要とする人が入居する。入居者8人に1人の看護人が付く。

第3ステージは、完全看護を必要とする人が入居する。入居者3人に2人の看護人が付く。

最初に Hostel と呼ばれる第2ステージの建物に入った。ベッドルーム、バス、トイレ、食料品倉庫、調理室、洗濯場、食堂、娯楽室などを見学した。大勢の入居者で賑わっていたホールでは、手を振って、明るく挨拶してくれた。

ナーシングホームと呼ばれる第3ステージの建物に入った。異様な雰囲気だ。ホールには、円形に並べられた椅子に老人達が座っていた。瞑想に耽っている者、目をつぶって体を左右に振っている者、黙々と積み木を積み上げている者、弱々しい声で歌っている者、皆自分だけの世界に入っていた。

個室では何人かの入居者と話した。老衰で体は思うように動かないが、頭はしっかりしていた。分かれる時、皆、キスを求めて来た。

ナーシングホームから第1ステージを見学し、ジョアルベイの施設を後にした。バスでフィンガルベイの施設に移動した。ここは第1ステージの施設で、1棟に2つのガレージがあり、2所帯が入居できるようになっていた。バス、トイレ、キッチン、ベッドルーム、居間で構成さ



マリーナリゾートホテル前にて最後の別れ
(左より、イネス、ジーン、高橋、国司、ボブ、村田、ミック、筆者)

れていた。現在52棟が完成し、さらに40棟を新設すると説明された。

⑬ 別れの朝

17日の朝を迎えた。ポートスチープンスを去る時刻が刻々と迫っていた。イネス、ミック、ジーン、ボブ、それにチャールズが見送りに駆けつけてくれた。

「ヒロ、ポートスチープンス観光協会からタマリーヘッド登頂の証明書を進呈する。」

見ると、私の名前入りで『昇天の証明』となっていた。嬉しかった。

「今度は私達の家でホームステイしなさい。待っているわよ。」

ジーンが私の手を強く握りながら言った。

「ヒロ、私の家にもホームステイしなさい。新しい妻が面倒を見て上げられるだろう。」

イネスが後ろから声を掛けてくれた。

何と私は幸せなんだろう。胸が熱くなるのを感じた。

4泊5日のポートスチープンス滞在だった。美しい街と一言で言える。景観が素晴らしい。自然が多く残っている。建物は立派ではない。しかし、そこに住んでいる人達が温かくて、親切で、人懐っこい。昨夜、海岸のベンチの上に交換レンズを置き忘れた。海岸を散歩する家族連れやベンチで話し込む若いカップルで随分賑わっていた。しばらくして気が付き、ベンチに戻った。レンズはそのままになっていた。何と安全な街なんだろうと思った。これなら安心して若い学生達を送り込める。私はこの街が大好きになった。

午前8時50分、私達を乗せたシドニー行きのバスは、定刻より10分早くホテル前を出発した。見送りに来てくれた人達は、いつまでも、いつまでも手を振っていた。

— 伊藤 公洋 (写真とも) —

『ようこそニュージーランドから』

短い期間ならば、海外からの友人を、もっと気軽に受け入れられるのでは...?こんな思いもあって、ゆがわら国際交流協会では、国際ソロプチミスト湯河原と共催で、ニュージーランドの中高生のホームステイを受け入れることになりました。やって来たのは、ニュージーランド北島のハミルトン市（オークランドの少し南）にある、私立の男子校セント・ポールズ・カレッジの生徒たち。授業で日本語を選択している、14~16歳の元気な少年14人と、引率の先生お二人です。それぞれ3月31日から4月4日まで、湯河原の家庭に滞在しました。湯河原駅に降り立った一行は、半ズボンに半袖姿。前日、成田についたばかりというのに、疲れた様子もありません。ホストファミリーとの対面式では、全員日本語で自己紹介をし、勇ましい民族舞踊を披露してくれました。

期間中は、それぞれの家庭で、ふだんの生活を通して日本を知ってもらいました。また、スポーツ少年団サッカー部とも練習試合をし、一緒に吉浜海岸でバーベキューを楽しみました。ちょうど春休みの今回は、小中学生のいるご家庭が、数多くホストファミリーを引き受けてくださいました。外国の文化や言葉に興味をもつ子供達が、たくさんいることを知り、改めてうれしく思いました。今後、文通などを通じて、この春生まれた新しい友情が、大きく育っていくことを望みます。



4/4' 96

「きっと、また来てね。」お別れの朝のホストファミリーと学生たち。駅広場、満開の桜の下で

オーストラリアに友を訪ねて... (その3)

ジェニーとの再会の余韻を胸に秘め、この旅行最後の目的地シドニーに到着した。シドニーの町を一言で表すとしたら、「海沿いの静かな町」とでも言いませんか。とにかく海の青さは驚きものです。町の中は、乗り降り自由なフリーチケットで乗車できる観光バスが走っていて、様々な観光スポットを廻ることができます。メルボルンと比べ、都会風な建物や、ショップが多い。海外旅行の一つの楽しみとも言える“ショッピング”への期待で、私の頭はもういっぱい。町の至るところにいる、日本人ハネムナーなどは眼中になく（結構多いのです）、バスが町を一周するまえに、「買い物だー」と声を上げたのは、総勢5人。帰国目前、お土産を買うのに七転八倒。さすがに二日目は、海外旅行経験豊富な木村さんと、私だけがショッピング。ほかの人は、それぞれに観光ということになった。高級ブティック巡りに、指をくわえながらひっついて行くだけの私でしたが、結局、ナイトクルージングの集合時刻ギリギリに（実はちょっと遅れた）ホテルに着き、皆さんにご迷惑をおかけしました。クルージングの前に、オーストラリアの海産物食べ納めとして、カキ、ロブスターなど、これでもかと頂きました。お腹いっぱい最高の気分でのクルージング。他の国でも何度か体験しましたが、私はこのシドニーの夜景が一番素敵だったように感じました。こうして、私たちの旅は幕を閉じました。

やっさ国際交流を通じて知った日本について、更に学びたいと思い、再び来日している人もいます。先日もジェニーから、兵庫県でスクールに通うことになったという手紙が届きました。今年の夏は、また湯河原に来たいと書いてありました。

国際交流協会の活動を通じ、ジェニーや、その他の国の友達との関係を作れたこと。これは私にとって、一生の宝物となることでしょう。このような素晴らしいチャンスをごくださった協会の方々、また一週間一緒に旅をしてくださった方々、心からありがとうございました。～おわり～（松野 由紀子）

シドニーのシンボル、オペラハウスをバックに。
右から三番目が松野さん。



風塵抄（司馬遼太郎逝く）

私の尊敬する作家の一人である、司馬遼太郎氏が忽然として世を去った。享年72歳だった。

万卷の蔵書から、史実にもとづき、日本、日本人とはを問い続けた人、多くの著書から、リタイヤーした後の私の読書の楽しみにしていた。

たまたま、産経新聞の風塵抄というタイトルで、去る2月12日のエッセイが絶筆になったのである。それを切抜きにしていた翌日の逝去だった。

サブタイトルに「日本に明日をつくるために」とあったが、誰もが感じていた昨今の日本の現状を憂い、先行きにある種の不安を感じていながら、さてどうすればすれば良いのか、それらの問題点を作家の視点から見事にとらえていた。

曰く、前段に、土地投機の対象になっている近所の農家の主婦が、半段ほどの畑に一本五円ほどのネギを植えている光景が書かれている。

宅地に転用されれば、坪八万円になるという。日本史上、はじめて現出したこの珍事象には、いままでの農業経済論も通用せず、労働の価値論もあてはまらない。

労働のよろこびもなく、農民の誇りもない。大願成就して、二階建アパートになり、そのころには、坪数十万円ぐらいになっていた。いかなる荒唐無稽な神話や民話でも、この現象の荒唐性には、およばない。これをもって経済現象といえるだろうか。

日本じゅうが、そのようになっていた。

こんなものが、資本主義経済であろうはずがない。……さらには、人の心を荒廃させてしまう。……こういう予兆があって、やがてバブルの時代がきた。

日本経済は――とくに金融界が――気が狂ったように土地投機にむかった。どの政党も、この奔馬に対して、行手で大手をひろげて立ちほだかろうとはしなかった。こまったことに、憲法が保証する経済行為なのである。

しかし、誰もが、いかがわしさとうしろめたさを感じていたに相違ない。そのうしろめたさとは、未熟ながらも倫理感とっていい。

日本国の国土は、国民が拠って立ってきた地面なのである。その地面を投機の対象にして物狂いするなどは、経済であるよりも、倫理の課題であるに相違ない。ただ、歯がみするほど口悔しいのは、「日本国の地面は、精神の上において、公有という感情の上に立ったものだ」という倫理書が、書物としてこの間、たれによってでも書かれなかったことである。……

住専の問題が起こっている。日本国にもはやあすがないようなこの事態に、せめて公的資金でそれを始末するのが当然なことである。

その痛みを通じて、土地を無用にさわるのがいかに悪であったかを――思想書を持たぬままながら――国民の一人一人が感じねばならない。

でなければ、日本国にあすはない。……と喝破されている。

晩年は、ほとんど歴史小説は書かなくなり、もっぱら日本の将来を憂うあまり、エッセイが多かったそうだ。

しかし、彼ほど、彼の死をいたみ、多くの人から追憶された人もめずらしい。そのよってくるところは、彼はいつも真実を追及し、その文体は平易で、万巻の書によって、日本の歴史をひもとき、ある特定の思想をもつ人にいわせれば、あの人の文体は説教くさいところがあるという。

それも言えるだろう。その過去の汚辱の歴史的事実を覆いかくしたくなる。人には、過去を訂正したいという気持ちがつよいからかも知れない。

ともあれ、もう十年は生きていてほしい人だった。しかし、彼は平成元年に、小学校六年国語教科書に、“二十一世紀に生きる君たちへ”というエッセイを残し、また自分は、私の人生は持ち時間が少ない。二十一世紀というものを見ることができない、と遺言めいたことを書いている。

小説も書いた文明評論家ともいうべき不世出の巨星を偲び、大いなる遺産に、追悼の特別発刊書もでている。

あまりにも、惜しい人を失ったというのが、ファンとしての実感である。

(石井宏樹)



【活動報告】

95クリスマス会...12月22日(金)夜、スタジオ千夢にて 60名参加

やっさ国際交流に参加のリム・ウェンチェン君(上智大学、オーストラリア)も、東京から駆けつけて、バイオリンを披露してくれました。仮装コンテストでは、カナダから小田原高校に留学中のデイヴ君のチームが優勝しました。

募金協力

クリスマス会チャリティーオークション売上金 ¥65,300 を下記へ募金いたしました。

日本ユニセフ協会.....¥10,000

地球大学スリランカ貧困家庭救済基金.....¥10,000

シャプラニール市民による海外協力の会.....¥10,000

ダルニー奨学金(タイ国児童への奨学金)....¥35,300

外国語講座

☆初級ハングル講座...東海大学交換教授 李 相俊(イ・サンジュン)先生による、韓国・朝鮮語の基礎講座が、2月6日より全9回の日程で開催されました。

お知らせ

第11回 やっさ国際交流のホストファミリーを募集します。

7月30日(火)～8月6日(火)、外国の青年のホームステイを受け入れてみませんか？
ブラジルの大学生および、東京の日本語学校に在籍するアジアの学生が、参加予定です。
詳しくは、協会事務局まで、お問い合わせください。 Tel.63-0111